氏　　名　岩鼻通明（いわはなみちあき）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　論文博第 445 号
学位授与の日付　平成15年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　出羽三山信仰圏研究

論文調査委員　（主査）教授 金田章裕　教授 石原　潤　教授 石川義孝

論文内容の要旨

本論は，出羽三山信仰を対象として，地理学の立場から調査研究を行ったものである。信仰の対象となる霊山はいわば周辺地域から参詣者を集める中心地として機能しており，信仰圏を機能地域として把握することが十分可能である。この中心（山）―周辺（里）の相互関係から，山岳信仰を地理学的に考察することが本論の目的である。

基本的視点は，山岳信仰の中心―周辺関係を聖域圏・準聖域圏・信仰圏の三つの領域からなる圏構造として把握することにある。すなわち，霊山の山頂を中心とする女人禁制の聖なる空間が聖域圏であり，その周辺の山麓に登山口としての山岳宗教集落が立地する空間が準聖域圏となる。さらに，広域に拡がる信者（参詣者）の居住する空間が信仰圏であり，それらの相互関係を地理学的視点から考察する。

(1) 出羽三山を取り巻いて，「八方七町と称される登山口が存在し，そこには宿坊の建ち並ぶ「山岳宗教集落」が形成された。この7か所の山岳宗教集落を事例として，まず起源を指標とする類型化を行い，手向と岩根沢を「近世再編型」，本道寺，大井沢，大網，七五三掛を「近世成立型」，肘折を「未成熟型」とする山岳宗教集落の類型を設定した。近世後期の出羽三山信仰の最盛時には，肘折を除く各山岳宗教集落は夏季の宿坊・山先達，冬季の檀回を経済的基盤とするほぼ同様の機能を有し，また，別当―清僧―妻帯修験―農民という階層性のある社会構造も類似していた。ただし，「近世成立型」では農民層が宿坊・山先達化した点において，「近世再編型」とは異なっていた。この差異は集落景観に反映し，「近世再編型」においては，妻帯修験と農民の居住が分離されていたのに対し，「近世成立型」では両者が混在していた。檀那場の分布の検討からは，「近世再編型」の山岳宗教集落は国郡郷村単位の檀那場が主体で，各坊の檀那場が錯綜していた「近世成立型」より広い勢力圏を有することが明らかになった。

また，明治初期の神仏分離は山岳信仰に大きなダメージを与えたが，「近世成立型」の山岳宗教集落は，明治以降衰退に向かったのに対し，「近世再編型」は現在もなお，その姿をとどめていることが確認された。

(2) ついで，出羽三山の信仰圏内に分布する資料として，末社・石碑・講の三者に注目し，それらの分布を検討することから，出羽三山の信仰圏の特徴を分析した。出羽三山の末社の分布は北海道から関東までの1都1道14県の広範囲に拡がっており，月山神社は東北地方北部に，湯殿山神社は福島県から北関東にかたよって分布しているのに対して，羽黒・出羽神社は比較的広範囲に分布していること，出羽三山碑は東北6県と関東7県および新潟県に存在し，湯殿山系と羽黒山系の別当寺の対立から，双方が競合した地域においては，石碑のほとんどが「湯殿山碑」となり，湯殿山系の勢力の及ばなかった地域では「三山碑」が建立されたこと，出羽三山の講は，東北地方，とりわけ，岩手，宮城，福島県には出羽三山信仰が濃密に分布し，新潟，千葉県にもかなりの分布がみられることが確認され，講の名称にも地域差が存在することが判明した。

一方，出羽三山信仰に関する具体的な民俗事例を民俗誌及び地方史誌類から収集し，筆者の聞き取り調査の事例も交えながら，各県ごとに比較検討を加えた。その結果，出羽三山信仰は東日本各地に多様な展開を示していることが明らかになり，参詣者の年齢を指標にすれば，出羽三山に隣接する地域では若年層が主体となり，出羽三山から徒歩で数日間を要する地域では成年層，遠隔地では老年層が中心となるような同心円的な信仰の分布を有していた。

また，出羽三山参詣は通過儀礼としての役割も果たしており，山形県内陸部では成人儀礼，千葉県では老年層への加入儀礼として意味付けられている。

(3) 本論において，100点を超える出羽三山参詣旅日記の所在を確認することができた。南東北および関東の遠隔地からの参詣は夏の開山期に行われ，往路と復路を異にする循環的行程がみられる。一方，北東北からの参詣は冬場の農閑期に，伊勢参宮の途上で羽黒山にのみに参詣する例が多くみられる。社寺参詣は俗世間を離れて聖なる未知の世界へと歩む信仰の旅であるゆえ，近世の遠距離参詣は全般的に循環的行程を示し，廻国巡礼的性格を有していた。

夏の開山期における出羽三山登拝は三山のすべてに参詣することが原則であり，羽黒山から月山を経て，湯殿山に参詣する表駆け（お峰駆け）が一般的な行程であった。それは，羽黒山の門前の手間が，出羽三山の「八方七口」の中で最大の山岳宗教集落であることとも関わるが，参詣費用の多くは，上り口の山岳宗教集落の収入となるため，「八方七町の山岳宗教集落は参詣者の争奪戦を展開したのであった。松山玖也・橘三喜・大淀三千風・松尾芭蕉・木村謙次・菅江真澄・高山彦九郎・斎藤茂吉の記した三山参詣の紀行文からは，三山登拝の詳細な具体例を知ることができる。

なお，旅日記に記載された霊山の宿坊における精進料理を主体とした食文化の考察も行った。

(4) 出羽三山を描いた大縮尺の古地図である近世の『湯殿月山羽黒三山一枚絵図』と『湯殿山論争絵図』から，出羽三山の聖域圏に関するさまざまな情報を得ることが可能であり，明治前期の『三山総絵図』からは，神仏分離にともなう景観の変化を知ることができるが，とりわけ『湯殿月山羽黒三山一枚絵図』は，その構図に羽黒修験のコスモロジーが秘められている貴重な絵図として評価される。また，『三山雅集』・『羽黒詣袖鏡』・『諸国道中金の草鞋』などの名所図会からも，出羽三山の山中他界に関する情報を得ることができる。

それらによれば，出羽三山の山中には，地獄と浄土の世界が展開するとされるが，越中立山ほどは地獄のイメージが鮮烈とはいえない。しかし，立山芦峅寺の女人救済儀礼と同様に，羽黒山にも閻魔堂・無明の橋・姥堂が存在し，女人禁制ではなかった羽黒山の血ノ池で女人救済の血盆経供養が行われていたことは興味深い。

(5) 以上の結果，出羽三山信仰は同心円的な圏構造を有していることが立証された。聖域圏と準聖域圏の境界は非日常的空間と日常的空間の境界と言え，具体的には女人結界地点がそれに相当する。また，準聖域圏の空間自体が，日常的空間と非日常的空間の境界に位置する両義的空間であるが，この準聖域圏と信仰圏の境界として，しばしば認識されたものにみそぎの場としての橋もしくは川があげられる。信仰圏の内部にも，同心円的な圏構造を設定することが可能となり，青少年層の登拝がみられ，共同体的結合の強い信仰形態がみられる山形県下（出羽三山から半径 50 km 以内）を第一次信仰圏に，成年層の参詣が中心で，代参講形式の信仰形態がみられる圏域（半径50～150 km）を第二次信仰圏に，老年層の参詣が主となり，同行仲間型の講の信仰がみられる圏域（半径150～350 km）を第三次信仰圏に措定しうる。さらに各圏域の内部にいくつかの地域類型を設定することができる。

出羽三山と鳥海山・蔵王山・飯豊山が山形県下では一対の山岳信仰として把握されており，明らかに相互関係が存在し，出羽三山信仰の有する祖霊信仰的性格からみれば，死者の霊魂が籠もる集落の背後の里山から，虚空蔵山と呼ばれるようないくつかの地域ごとの峰に収斂していき，最後は月山に集まるという，整然とした階層的構造の存在が指摘できる。

論文審査の結果の要旨

日本において，宗教ないし宗教に関わる事象の地理学側からの研究は多くない。また，宗教の地理学的研究は，巡礼の研究と宗教景観の研究において，ある程度の蓄積がみられるとは言うものの，依然として断片的であるといわざるを得ず，一貫性と連続性が乏しい。

この中にあって，論者は，出羽三山という東北地方最大の山岳信仰をとりあげ，その山中世界のみならず，7ケ所の登拝口に立地している宗教集落や，東日本一円に展開している信仰圏を対象として多年にわたる調査を実施し，多角的な分析を行った。『出羽三山信仰圏研究』と題された本論は，研究史の整理および課題設定をした序章と，結論として出羽三山宗教圏の圏構造を析出した終章を含め，全6章で構成されている。

序章では，日本有数の山岳宗教である出羽三山を研究対象とする主要な理由として，現在もなお広い信仰圏を保ち続けていること，関連史料が豊富なことをあげている。その上で，山岳信仰の対象となる霊山は，一般に信仰圏から広く参詣者を

集める中心地として機能していることに注目し，その中心—周辺の相互関係から，信仰圏を圏構造を有する機能地域として把握し得るとする基本視角を呈示している。作業仮説として設定されるのは，霊山の山頂を中心とする女人禁制の聖なる空間としての「聖域圏」，その周辺の山麓に登山口として形成される山岳宗教集落が立地する「準聖域圏」，その外側にさらに拡がる参詣者（信者）の居住圏である「信仰圏」であり，本論は出羽三山におけるそれぞれについての実態の描出と，相互関係の考察が主題となっている。

第一章「出羽三山をめぐる山岳宗教集落」は，「準聖域圏」をとりあげたもので，「八方七町と称される７カ所の山岳宗教集落について，主として起源を指標に，「近世再編型，近世成立型，未成熟型」の三類型を析出した。前二者の類型では，近世後期における出羽三山信仰の最盛期において，各集落は夏季に宿坊経営と山先達としての参詣者の案内，冬季に檀那場を巡る檀回を軸とした経済的基盤を確立し，別当—清僧修験—妻帯修験—農民という階層からなる社会構造を有していたとする。「近世再編型」はこの階層が截然とし，清僧修験はもとより妻帯修験と農民との居住が分離していたのに対し，「近世成立型」では農民層が宿坊経営者・山先達化し，妻帯修験と農民の居住が混在していたとされる。さらに，「近世再編型」の山岳宗教集落は，国郡郷村単位の檀那場を主体とし，明治以降もその姿をとどめているのに対し，「近世成立型」は，檀那場が錯綜し，明治以後は衰退したことも明らかにされた。

第二章「出羽三山信仰の地域的展開」では末社・石碑・講の分布を採りあげている。出羽三山の末社は，北海道から関東までの１都１道14県に分布し，月山神社は東北地方北部に，湯殿山神社は福島県から北関東に偏在していることを指摘している。出羽三山碑は東北・関東各県と新潟県に分布し，湯殿山系と羽黒山系の競合地域では「湯殿山碑」が，湯殿山の勢力の及ばなかった地域で「三山碑」がみられること，講の分布は岩手・宮城・福島の各県で濃密であり，新潟・千葉県にまで及んでいること，ならびに講の名称や出羽三山信仰をめぐる民俗の地域差が存在すること等について指摘している。また，参詣者の年齢からすれば，出羽三山に隣接する地域では若年層が，徒歩で数日間を要する地域では成年層が，遠隔地では老年層が主体となっていたこと，山形県内陸部で成人儀礼，千葉県で老年層への加入儀礼となっていることなども見出している。

第三章「旅日記にみる出羽三山」では，100点以上の旅日記に加え，松尾芭蕉・菅江真澄・高山彦九郎等，近世から明治の文人等の紀行文を見出して整理することにより，出羽三山参詣のいくつかの共通情報を見出している。第一に，南東北および関東の遠隔地からの参詣は，聖なる円環の旅とでも言うべき循環的行程をとり，往路と復路を異にするものであること，第二に，三山のすべてに参詣することが原則であり，羽黒山から月山を経て，湯殿山に参詣する「表駆け」が一般的であったこと，第三に，参詣者は講から派遣されることが多く，個人の参詣というより集団の参詣の意味を強く帯びていたこと，第四に，参詣費用の多くが登り口の山岳宗教集落の費用となるために，参詣者の争奪が行われたこと，などである。

第四章「出羽三山の山中他界」では，まず，出羽三山を描いた近世『湯殿月山羽黒山一枚絵図』を分析し，その構図に羽黒修験の曼荼羅的コスモロジーが秘められていることの徴証を検出している。さらに，名所図会類の記載や越中立山との対比の中で，羽黒山における地獄と浄土の展開の具体的様相を整理している。また，明治前期の『三山総絵図』からは，明治初期における神仏分離による出羽三山の景観変化を追跡している。

終章では，以上の結果として出羽三山の信仰圏の圏構造を結論的に説明している。「聖域圏」と「準聖域圏」の境界は非日常的空間と日常的空間の境界であり，女大結界地点がそれに相当するものの，「準聖域圏」の空間自体が両者の境界に位置する両義的空間であることが明示されている。「準聖域圏」と「信仰圏」の境界として認識されているのが，みそぎの場としての橋・川であるという。

「信仰圏」の内部では，出羽三山から半径 50 km 以内の山形県下を，青少年層の登拝がみられ，共同体的結合の強い信仰形態が展開する「第一次信仰圏」とし，その外側の半径50～150kIn 圏を，成年層の参詣が中心で，代参講形式の信仰形態がみられる「第二次信仰圏」，その外側の半径150～350 km 圏を，老年層の参詣が主となり，同行仲間型の講の信仰形態がみられる「第三次信仰圏」とする。

また，出羽三山信仰の祖霊信仰的性格からみれば，死者の霊魂がこもる集落の背後の里山から，供養が進むにつれて「高い山」に昇り，虚空蔵山と呼ばれるようないくつかの峰に収斂していき，最後は月山に集まる，というもう一つの階層的構造の存在も指摘されている。

本論においては，例えば宮田登の信仰圏設定の指標の批判的検討などのように，多様な資料が呈示され，それに基づいた議論が展開しているものの，100点を超える旅日記や各県ごとにまとめられた多くの民俗事例などの分析が，必ずしも十分に行われているとは見られないという物足りなさがある。しかしながら，従来の研究の多くが，山形県の地元史料による検討や，千葉県内史料などによる検討といった，郷土史的色彩が強いものであったり，神仏分離以降の民俗資料中心の記述であったりし，個別的で総合的視角が不十分であったのに対し，本論では，広範に及ぶ多角的な資料収集と相互関係の検討が精力的に行われていること自体を評価すべきであろう。それぞれの資料群の分析から導かれた結論は必ずしも先鋭なものとはなっていないものの，信仰圏の圏構造を明示的に描出することに成功し，また宗教の地理学的研究が統合的研究のレベルに到達したこと自体も斯界にもたらした本研究の評価すべき成果であると認められる。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，平成15年2月6日，調査委員3名が本論文とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。